

史片九一

誰が金佐鎮を殺したか？

金佐鎮は、青山里戦闘の指導者として有名である。一九一九年の三・一独立運動以後、「満州」では民族主義者たちによる武装闘争が展開された。いくつもの独立団体が組織され、日本軍警と数多くの戦闘が行われたが、その中でとくに日本に大きな打撃を与えたのが一九二〇年九月の青山里戦闘であり、それを指導したのが独立団体の北路軍政署総司令官金佐鎮であった。青山里戦闘の後も「満州」で活動を続け、一九二五年には金赫らとともに新民府を組織し総司令となり、さらに一九二九年七月にはアナキズム理念を取り入れた韓族総連合会を組織した。これは当時、急速に勢力を拡大してきた共産主義者たちに対抗するためであった。

韓族総連合会創立の半年ほど後の一九三〇年一月二〇日、金佐鎮は中東線山市の自宅付近で暗殺された。当時から、この暗殺の下手人は朴尚実であり、背後でそそのかした者は金奉煥（一名金一星）だとされ、金佐鎮暗殺に関する多くの記述はこの説にそって書かれてきた。しかし、最近になって中国から、暗殺したのは火曜派共産党員の李福林であるとの証言が出てきた。当時火曜派で活動していた梁煥俊の回想によるもので、「この暗殺は火曜派の朝共総局の決定によって行われたもので、実行したのは孔道珍、またの名を崔東範、のちの洙河遊撃隊の組織者のひとりである李福林である」（和田春樹『金日成と満州抗日戦争』）というのである。

従来の説の根拠となったのは、韓族総連合会側の発表ではなかったろうか。韓族総連合会の一翼を担っていたアナキストたちの機関紙『奪還』九号（暗殺から二ヶ月後の四月二〇日発行）には、「本件首謀者ハ曩ニ北平ニ於テ金天支ト共ニ共産主義刊行物『革

命』ヲ発行シタル金鳳煥（一名一星）ニシテ高麗共産党満州総局の主要幹部ナリ。其ノ外李周弘、李鐵洪、金允等ノ連累者アリ（中略）如斯陰謀ヲ実現シタルハ白痴ナル朴尚実ヲ買取使用シタル結果ナリ」（『外務省警察史・満州之部』訳文所収）となっている。

金佐鎮が殺害された時、おそらく目撃者はいなかったと推測される。ではどうして殺害の主導者が金奉煥であることがわかったのか。

韓族総連合会には、保安隊という武装集団が組織されていた。暗殺の下手人搜索の任務にあたったのはこの保安隊であった。先の『奪還』では「（保安隊は）首謀者金鳳煥共犯李周弘等ヲ逮捕シ死刑ニ処シタリ」と記している。しかし、搜索にあたってはかなり強引な手段がとられたのではなかったか。そのことは、共産主義者側からのピラからもうかがえる。すなわち共産主義者側のピラでは、「金佐鎮の死後其の復仇として海林、山市地方に於て、善良なる農民等を金佐鎮暗殺の嫌疑者なりと称し数十名を虐殺したのではないか」（『外務省警察史・満州之部』訳文所収）と、関係のない農民を多数虐殺したと非難している。

実際、どの程度の証拠があつて金鳳煥らが首謀者とされたのか今一つ明確ではない。したがって、梁煥俊の証言による新しい説はかなり有力であると思われる。

なお、李福林は、中国共産党阿城県書記をしている時に逮捕され、三一年一月出獄後はハルビン担当の満州省委巡視員に任命され、三四年六月には東北反日遊撃哈東支隊党委書記となる経歴をもつ。

いずれにせよ、金佐鎮が共産主義者によって暗殺されたことは間違いない事実であろう。そして暗殺の意図が、韓族総連合会を崩壊させるところにあつたのであれば、それはかなり成功したといえる。金佐鎮の存在により抑えられていた「民族派」とアナキストの対立が表面化したからである。（堀内 稔）